

サロン2002 in大分(臼杵)

竹腰重丸を語る(ツアー報告)

2013年3月下旬に、桜咲く大分臼杵での「サロン in 大分」を行いました。いわゆる「出張サロン」は2008年度(2009年3月21日～22日の「サロン in 熊野」=熊野の中村覚之助を探る旅以来です。いつも「サロン in○○」(こういう呼び名にしました)は新たな発見や出会いが満載なのですが、今回も予想通り“最高”でした！ 概要を報告します。

記

主催：スポーツ文化研究会「サロン2002」、「竹腰重丸を語る」実行委員会

後援：臼杵市、臼杵市体育協会、臼杵市教育委員会、日本サッカー史研究会、
一般社団法人東大LB会、ビバサッカー研究会、
臼杵市サッカー協会、社団法人大分県サッカー協会

協賛企業：富士甚醤油(株)、フンドーキン醤油(株)、(株)木梨ふぐ九州店、(株)久家本店
いづみ印刷(株)、吉田医院、みずほ厚生センター、大塚鍼灸接骨院

会場：臼杵市民会館小ホール(大分県臼杵市大字臼杵72番83 TEL:0972-63-7977)

日時・概要：2013(平成25)年3月23日(土) 13:45～16:50

第1部 講演「竹腰重丸伝—古武士の風格もち、技の奥義を究める」 浅見俊雄

第2部 シンポジウム「竹腰重丸氏を語る」

日本サッカー協会顧問

浅見 俊雄

スポーツジャーナリスト

牛木 素吉郎

豊後歴史探求会代表

吉田 稔

コーディネーター

中塚 義実

<「サロン in 臼杵」参加者(敬称略)>

【サロン2002会員】阿部博一、牛木素吉郎、金子正彦、中塚義実、宮明透

【サロン2002未会員】

- ・日本サッカー史研究会の方々…浅見俊雄、小堀俊一、福島寿男(注:阿部・牛木・中塚も会員です)
- ・臼杵市の方々…安東信二、大塚州章、緒方孝浩、小野俊二郎、久家里三、斎藤克己、武口秀樹、吉田稔、和田敬生、臼杵市長ほか
- ・臼杵市以外からご参加の方々…岩本芳久(熊本市)ほか。シンポジウム参加者はあわせて約50名

参考:「出張サロン」改め「サロンin○○」一覧

- 1999年度 … 新潟(サッカー振興を市民の手で)、掛川(クラブ運営と公益性)
- 2000年度 … 新潟(サッカー振興を市民の手で2)
- 2001年度 … 清水(清水のサッカー&DUOリーグ紹介等)、神戸(DUOリーグ紹介等)
- 2002年度 … 刈谷(刈谷のサッカー&DUOリーグ紹介等)、神戸(W杯総括シンポジウム)
- 2003年度 … 大分(W杯後の現状&DUOリーグ紹介等)
- 2004年度 … 伊香保(ザスバ草津の試合観戦と現状)、成岩(スポーツクラブ視察)
- 2005年度 … 名古屋(広域スポーツセンターを考える)
- 2006年度 … フランクフルト(PV観戦&スポーツクラブ視察)
- 2007年度 … 高知(トリムカップの際に「成田十次郎先生に聞く」)
- 2008年度 … 岡山(ファジアーノの方々)、金沢(21世紀美術館にて)、熊野(中村覚之助)

<概要 (2013年3月22~24日)>

3月22日 (金)

◆飛行機が遅れたおかげで発見!

9:55羽田発のJAL便で大分へ向かうべく、空港で浅見氏、牛木氏と合流した。搭乗手続きをしようとしたまさにそのとき、飛行機に不具合が見つかり待機の連絡が…。昼食券一人1,000円分のサービスがあったので、仕方なく待合喫茶で時間をつぶすことになった。

浅見氏が持参された古いアルバムを見せていただきながら、さっそく竹腰重丸を語り合った。すでに3月18日の日本サッカー史研究会、および3月5日の事前打ち合わせで、浅見氏・牛木氏・中塚は顔を突き合わせて話をしているが、古いアルバムにはまだ見たことがない写真が豊富にある。あの時代にこれだけ整理されていることから、竹腰家の“格”が感じられる。そしていくつかの発見があった。

- ・竹腰重丸の父、亀太郎の葬儀の写真に、大連一中校長、服部精四郎からの生花があった!
- ・服部精四郎の銅像前で撮った写真がある!

そうこうするうちに「大変長らくお待たせしました」のアナウンスが。

大分に着いたのは14時ごろ。約2時間半遅れであった。

◆宮明氏の車で「大分銀行スタジアム」へ

大分空港では、宮明透氏が迎えに来られていた。中津江村での合宿から直行とのことである。

本来ならば別府あたりの温泉につかって一休みしたいところだが、飛行機が遅れたため省略(残念)。「大分銀行スタジアム」へ向かった。2002年のときは「ビッグアイ」と呼ばれていたこのスタジアムも、その後「九州石油(きゅうせき)スタジアム」となり、いまは「だいぎんスタジアム」と呼ばれているそうだ。スポンサーが変わるのは別にかまわないけど、スタジアムの呼び名が変わっていくのはどうなのだろう。

大分県が所有するこのスタジアムは、株式会社大宣が指定管理者となって公園全体を管理する。この日は所長の後藤英治氏のご案内で、スタジアム内外の状況をいろいろお聞きすることができた。

中央に設けられたVIPルームは、正面ガラス張りのとても見やすい座席である。しかし密室なので会場の音声は耳に入らない。皇太子殿下ご来臨の際にガラスを取り外してほしいというリクエストがあり、大変だった話をお聞きした。トイレはものすごく広い。こんな広いトイレで何をするのだろう。



だいぎんスタジアムのVIPルームにて

今夏の高校総体では陸上競技の会場となるそうだ。トラック種目はよいのだが、投擲種目では数千発の砲丸やハンマーが芝生のピッチに投げ込まれる。想像したくないむごい光景である。高校総体の数日後、同じピッチで大分トリニータの試合がある。隣に投擲会場もあるのに…。何とかならないものか…。

大分センチュリーホテルへチェックインしたのは17時ごろだった。

◆懇親会は「こっこつ庵」。懇親会後は天然温泉「サマサマ」へ

18時頃から懇親会。ホテルから歩いてすぐの「こっこつ庵」は、戦前からあるような木造のレトロな大分郷土料理屋。懐かしい看板が周りを覆っている。

浅見氏、牛木氏、宮明氏に加え、臼杵市議で「竹腰重丸を語る会」実行委員長の大塚州章氏、九州サッカー協会審判インストラクターの永松氏、そして日本銀行大分支店長の岩崎淳氏が参加された。JFAで国際大会時に審判の通訳をされたことがあるという岩崎氏は、元国際審判員・JFA審判委員長の浅見氏が大分入りする情報を3月21日付の大分合同新聞（シンポジウム案内が掲載）でみて宮明氏と連絡をとり、多忙な中、駆けつけてくださった。

懇親会が終わって皆ホテルに戻ったが、私は宮明さんに聞いていた「新川天然温泉SamaSama」へ出かけた。タクシーでワンメーターの天然温泉でゆったりくつろぐことができた。

どこかで会ったことのある人がいた。向こうも挨拶をしてくる。A級指導者養成講習会（私はスポーツ社会学の講師をしている）の受講生だったセレッソ大阪のコーチである。翌日のナビスコカップのため大分入りし、スタッフで温泉へ来たらしい。大分へ来たなら、もちろん温泉ですよ。



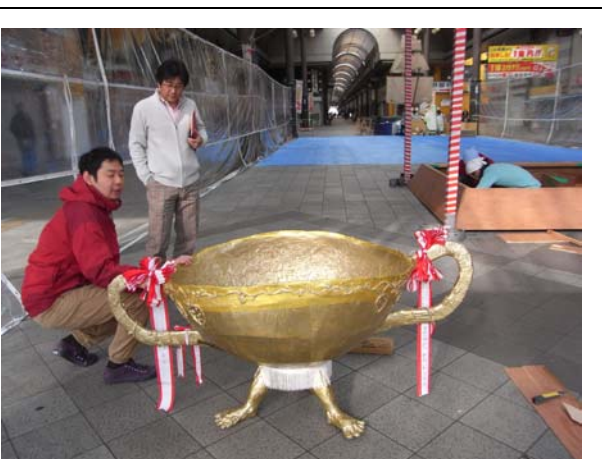
「こっこつ庵」外観。レトロな感じがいい

3月23日（土）

◆「どんどこ！巨大紙相撲」の会場はホテル至近！

朝食前にホテル周辺を散歩した。本来なら旅先ではジョギングしたいところだが、3月10日のぎっくり腰（くしゃみ一発！）明けの身には散歩がふさわしい。サロン2002のロゴ制作者である土谷享氏から事前に、3月24日に大分市内で「どんどこ！紙相撲大会」をやっているので大分にいるという話を聞いていたので、会場まで行ってみた。ホテルからはものの5分である。

朝食後、牛木氏と、熊本から来た岩本氏（3/30の公開シンポジウム「U-18フットサルを語ろう！」の演者）をお誘いし、改めて会場へ行ってみた。土谷さんはじめ数名の方々がせっせと働いている。優勝者に授与される金色のカップはトイレットペーパーできているらしい。よく見ると、カップの下に足が3本ついている。八咫鳥ならぬ八咫カップだろうか。臼杵はJFAシンボルマークの作者である日名子実三のふるさとでもある。臼杵入りする前に三本足のカップにめぐり会えたのはおもしろい。24日にもし時間があれば、「どんどこ！紙相撲」をやっているところをみてみたいものと思った。



「どんどこ！巨大紙相撲」の優勝杯は3本足！

ホテル発は10時。それまでの時間を使って、3月30日の公開シンポジウム「U-18フットサルを語ろう！」の演者である岩本芳久氏と打ち合わせをした。熊本県サッカー協会フットサル委員長の岩本氏は、このために前夜、熊本から大分入りし、臼杵のシンポジウムにも参加される。3月30日もおもしろいシンポジウムになりそうな予感がする。

◆臼杵市内のシンポジウム会場へ

約1時間のドライブで臼杵市内に入った。道路と鉄道が交差する鉄橋に、「これより城下 温泉なし 温心あり」の標語が書かれている。なんとなく微笑ましい。

車で市内をぐるぐる回りながら、ここがキリシタン大名、大友宗麟の建てた臼杵城の城下町であり、関ヶ原後に美濃から移ってきた稲葉家が治める歴史ある町であるということが感じられた。何といても戦災に遭わなかったのがよい。戦争で焼けなければ、日本各地にこういう風景が残っていたかもしれないと思うと、何とももったいない気がする。こういう町で竹腰重丸が生まれ、中学2年で大連に引っ越すまで育ったのだということを感じながら会場の市民会館へ向かった。

11:00頃に到着した。そこで豊後歴史研究会代表の吉田稔氏を交えて最終打ち合わせができればと考えていたが、食堂を営まれる吉田氏はぎりぎりにならないと会場入りできないことがわかった。大まかな流れを浅見氏、牛木氏と確認し、あとは流れに任せて進行することで打ち合わせを終了した。



臼杵の入口。妙に頭に残る一言でした

◆「竹腰重丸を語る」

第1部は、竹腰重丸の娘婿でもある、JFA顧問の浅見俊雄氏の講演「竹腰重丸伝—古武士の風格をもち、技の奥義を究める」である。竹腰重丸の誕生から臼杵時代、大連時代と続く少年～青年期の話、旧制山口高校から東京帝国大学、そしてその先へと続くサッカー一筋の人生を、豊富な写真を用いてご紹介くださった。家族の話や病気の話など、身内でしかわからない話も交えて紹介されたご講演は、参加者の心に響くものであった。

第2部のシンポジウムはまず、竹腰重丸が生まれ、育った臼杵について吉田氏から語っていただき、竹腰家がかなりの上級士族であったことが明らかにされた。「古武士の風格」はこうした家庭と地域の環境から生まれたものであると想像される。中学2年で転校した大連一中は、自主自律を教育の根幹に据える服部（西内）精四郎校長の教育方針で、リベラルな環境の中、サッカーと座右の銘「進于技」に出会う。チョウ・ディンとの出会いにはじまる選手としてのキャリア、指導者としてのキャリア、そして1976年の財団法人化まで続くサッカー協会の牽引車としての貢献…。この短い時間で語り尽くすことは到底できない。改めて竹腰重丸を語る会を開くことを約して、シンポジウムを閉会した。

会場からは、浅見氏より1学年年長であるという方が、竹腰重丸と小学校時代に同級だった「安東さん」から聞いた話を紹介された。竹腰は剣道だけでなく、水泳も、そして器械体操も得意であったとのこと。安東さんとは、今回実行委員をされている安東信二氏の祖父。会場に来ていた信二氏の中学生の息子が「曾じいちゃんの名前が出てきてびっくりした」と安藤氏に語っていただけでなく、安東氏にとっても初耳だったそうだ。「昔話」とは言っても100年ぐらいのことなので、いまともつながってくるのがおもしろい。

なお、シンポジウムの内容は、後日改めて報告する。



シンポジウム会場

◆日名子実三作「八咫鳥」

ところで会場には、高さ20cmほどの銅像が飾られていた。臼杵商工会議所の武口秀樹氏が持ってこられた「八咫鳥」という作品である。作者は日名子実三。神武天皇の頭上に八咫鳥が乗っている姿である！

これには驚いた。聞くとところ（神話・伝承）によると、高天原（宮崎県高千穂峡のあたり？）から出発した神武天皇の東征軍は臼杵のあたりを船に乗り、瀬戸内海経由でまずは大坂へ。そこで上陸したが厳しい抵抗にあい、いったん撤収して熊野へ回り、那智勝浦から上陸し（石碑を「サロンin熊野」で確認済）、八咫鳥の案内で熊野古道を歩いて大和入りしたことになる。八咫鳥神話はここ臼杵にもあり、それを臼杵出身の日名子実三がこのような形で残したことに大きな意味があるように思える。

銅像の裏面を見ると、「社団法人帝国軍人後援会」の「創立40周年記念表彰」として「優秀軍人模範者」に贈呈されたものであることがわかる。二・二六事件のあった1936年のことである。

JFAミュージアムに展示したいという話をいただいた。素晴らしい話である。そのためのイベントをしっかりと企画したい。

竹腰重丸から日名子実三を経て、八咫鳥・神武天皇まで…。すごいつながりである。



◆臼杵城址散策

シンポジウム終了後、臼杵の方々のご案内で、車に分乗して臼杵城址公園を訪ねた。桜は7分咲きと行ったところだろうか。東京だったら大勢の人が集まるだろうけど、ここでは花見の宴会は一グループだけだった。



臼杵城址公園から。奥の山には山桜が満開！

ここにも日名子実三作の銅像「廃墟」がある。牛木氏いわく、銅像は戦前の金属供与のためふつうは残っていないのだが、ここではよく残っていたものだ。地元の人たちがこの銅像の価値を認めて守ってきたからだろう、と。それだけ臼杵の人たちの文化度が高かったということなのだろう。



日名子実三作「廢墟」の前で

◆春光園での懇親会&2次会ーそれぞれの“宿題”

いったんホテルへチェックインしてから、懇親会会場の春光園へ。稲葉藩士の武家屋敷跡らしく、伝統的な、とても素敵なところである。竹腰重丸に東京大学で直接会って話をしたことがあるという97歳の久家氏（久家本店前代表）をはじめ、臼杵市関係、協会関係など総勢約30名の懇親会は大変面白いものだった。楽しみにしていたふぐ料理も、臼杵独特の食べ方で堪能することができた。

2次会も風流な和風パブ。臼杵と竹腰重丸を語りながら、それぞれの“宿題”を明確化した。

- ・『竹腰重丸伝』を出版する … 浅見氏が自分自身に課された宿題。これを皆で応援していく。
- ・東京で「竹腰重丸を語る」を開催する … より多くの方に知ってもらう。
- ・日名子実三「八咫鳥」像をJFAサッカーミュージアムに展示する … 東京での「竹腰重丸を語る」会とあわせてイベント化し、盛り上げる。
- ・「竹腰杯」を実施する … 既存の「校区対抗少年サッカー大会」に出すのは妥当な話である。それに加えて（または別に）、シニアの大会を臼杵で行い、それに竹腰重丸杯を出すのはどうか…
- ・芝生のグラウンドをつくろう！ … シニア大会をやるのなら、芝生のグラウンドは必須。お年寄りには土の上ではやってくれない。伝統的に野球がさかんだった臼杵にはサッカー場がないという。この機会にぜひ芝生のグラウンドを！

ということで、それぞれにさまざまな“宿題”が出た飲み会であった。これらの“宿題”は、少しも苦にならない、非常に前向きなムードの中で互いに課されたものである。勢いのある人たちと、勢いのあるテーマで盛り上がり、とてもよい飲み会だった。

3月24日（日）

◆臼杵市内をめぐる

8:50にロビー集合。午前中は臼杵市内の観光である。

その前、ちょうど朝食をとり終えたころ、大塚氏から電話がかかってきた。「腰のマッサージをしましょう」と言ってくれている。大塚氏は整骨院を開業されている鍼灸師でもあり、地元のさまざまなスポーツチームのトレーナーとしても活躍されている。ぎっくり腰明けの私の腰を気にかけてくださっているのがありがたい。お言葉に甘えることにした。シンポジウムに来た臼杵で、地元の鍼灸師にマッサージと針治療をしていただけたとは思わなかった。感謝！

さて、浅見氏と牛木氏が泊まっておられる春光園は、前夜の懇親会ときには気付かなかったが中庭が素晴らしい。しばらくそこでくつろいだのち、臼杵市内の観光にいざ出発。

まずは国宝臼杵大仏。仏様の首が落ちていたものを1980年から14年間にわたる修復工事で胴体に戻し

たらしい。その際、戻すべきか戻さざるべきかの大議論があったらしい。おもしろい話である。



国宝白杵大仏の前で

次に熊野神社へ。ここでは八咫鳥が海上を飛び、船を導いているような古い絵があった。いつ頃の作品かはわからないようだが、八咫鳥が3羽いることはわかる。大変貴重なものである。



熊野神社にあった絵馬。3羽の八咫鳥が船を導いている

そして竹腰重丸宅跡地。海添（かいぞえ）という地名のとおり、かつてはすぐそばまで海が迫っていたという。跡地はマンションになっていたが、武家屋敷が並んでいた面影は残っている。そして驚いたことに、今回の実行委員長大塚氏の生家は、竹腰重丸生家の隣家であった！ 大塚氏も大変驚いていた。いろいろつながってくるものである。これだから出張サロンはやめられない。



左が旧竹腰家跡、右が大塚氏生家跡。何とお隣さんだった！

このあと、白杵小学校や武家屋敷跡、八坂神社などを訪れ、古い街並みを堪能しながら散策した。「サ

ーラ・デ・うすき」(サーラとは、ポルトガル語でサロンのこと)という観光スポットに、臼杵の著名人のパネルが展示されている。日名子実三と竹腰重丸が紹介されているが、この他にもこの町からは各界の著名人が次から次へと輩出されている。人口4万人ほどの小さな町からなぜ多くの人材が出てくるのか。非常に興味深い。



臼杵の街並み。戦災に遭わなかったら日本の町はどこもこうだったかも



「サーラ・デ・うすき」には、竹腰重丸と日名子実三が並んで紹介されている

昼食は、久家本店向かいの「もんく食堂」。昨日の演者である吉田稔氏がやっておられるお店で、850円の昼定食をおいしくいただいた。



吉田稔氏の「もんく食堂」

昼食後、臼杵市の方々とお別れした。いろんな方にお世話になった。心より感謝したい。

来るときに「これより城下 温泉なし 温心あり」と書かれていた鉄橋の反対側には、「町よし ふぐよし 白杵よし またどうぞ」と書いてあった。また来よう！

◆大分市内にて「どんどこ大相撲」

さて、まっすぐ大分空港へ行くと少し時間が余る。帰りの飛行機は16:50大分発である。そこで、大分市内でやっている「どんどこ！巨大紙相撲 竹町場所」を見ることにした。



大分市内の「ガレリア竹町ドーム広場」は、「どんどこ！巨大紙相撲 竹町場所」の会場に！

竹町商店街に着いたのが13:30頃。ちょうど開会式が始まるころだった。仰々しい挨拶（あえて仰々しくしている？）に続いての土俵入り。子どもたち（高校生や大人もいる）が作った巨大紙相撲にはそれぞれちゃんとしこ名と得意技があり、来場者に配布された力士名鑑に記載されている。一番かっこいい力士を投票する制度もあり、得票数の多かった力士は「技能賞」として表彰される。商品は地元商店街からの景品。タニマチがこのイベントをささえる構図は、ホンモノの大相撲と同じである。ちなみに主催は大分県教育委員会。行政を巻き込むといろんなことがスムーズに回る。

サロン2002会員で、サロンのロゴ制作者の現代アーティスト、KOSUGE1-16の土谷享さんは「講師」という肩書きで、ルール説明や審判員紹介などを行っていた。

取り組み開始。力士の制作者たちが土俵をどんどこ叩いて紙相撲をするという単純な遊びだが、これがおもしろい。大人も子どもも一緒になって盛り上がっている。たぶん関係ない人でもどんどこしてよかったのだろう。



こんな感じでどんどこやっています

会場は大賑わい。汽車で臼杵から大分へ移動した阿部博一氏も合流し、再会を楽しむ。まさか大分で、竹腰重丸を語った後に「どんどこ！巨大紙相撲」でサロンの仲間とめぐり会えるとは…

浅見氏、牛木氏もともに大喜びで、感心しきりであった。宮明氏は、地元での展開に何か新たな可能性を見出されたかもしれない。スポーツとアート。ともに“ゆたかなくらし”には欠かせない、大切な文化である。小一時間そこにて十分楽しみ、空港へと向かった。

空港で宮明氏と別れ、羽田空港で浅見氏、牛木氏と別れた。

とてもよい旅だった。次につなげていきたい。

以上（文責：中塚義実）

<参加者・関係者からのコメント>

【大塚 州章（実行委員長）】

約半年前より宮明先生よりお話を頂き、私自身サッカーは学校の体育の授業ぐらいでしかしたことのない者が、何が出来るのであろうと不安でした。このときに初めて竹腰氏と浅見先生のお名前を知ったぐらいですから！そこから調べ始めて、これは大変なイベントであることの実感を持つとともに、頭の中がぐちゃぐちゃになっているのを冷静に整理しなおしました。あれよあれよといろいろな発見が出てくる中で、とどのつまりが、なんと竹腰氏の生家と私の生家が隣り合わせ！これには、さすがの私も100年の月日を越えた縁を感じ、まるで引き寄せられるように関わる運命であったと感じざるを得ませんでした。

浅見先生・牛木先生の優しいお人柄と、中塚氏が私と同級生ということもあり、楽しく3日間を過ごし、お別れのときは、本当に名残惜しかったです。

課題の3つのうち、少年サッカー大会に竹腰杯は実現しそうで、残された2つ、東京での神武天皇像のセレモニーとシニアサッカー大会・サッカー場の建設に向けて、沢山の協力を仰ぎながら進めてまいりたいと思います。日本サッカー協会と臼杵市の関係がより深まっていくことを願いながら、今回関係各位に大変感謝申し上げます。

【牛木 素吉郎（演者）】

臼杵市は、戦災にあわなかったもので、古い城下町の面影が濃く残っています。美しい町です。竹腰重丸の生まれ、育ったあたりは、昔の武家屋敷の地区でした。

竹腰重丸の古武士のような風格ときびしい努力で技術を磨いた精神力は、このような地域環境で育まれたものだと感じました。比較的小さな町であるため、よい気風が町全体で保たれていたのではないかと想像しました。

臼杵藩の家老の娘であった母親のしつけも厳しかったらうと思います。

児童期の家庭環境、地域環境が重要だと思いました。

古い小さな熊野神社で見た古絵馬にびっくりしました。3羽の八咫鳥が、船を先導している絵のようです。記紀には、船を導く話は出てこないように思います。臼杵の人たちの間に、このような伝承があったのでしょうか？

いろいろ、新しい発見もあった有意義な旅でした。

地元の方々の、温かいおもてなしに感謝、感激です。。

【宮明 透 (サロン2002)】

「竹腰重丸を臼杵市で語る」、そして「大分のフットボールカンファレンスで牛木さんに日本サッカー史を講演していただく」、この念願だった、私にとって熱い思いのイベントが1週間の間に起きて、さらに勤務する大分高専のサッカー部の中津江村合宿（監督&審判&6高専が集まる主催者として昼も夜もフル稼働）に卒業式&謝恩会と入ってきて、目まぐるしい1週間というか、どうなることかと思いつつ突入していった忘れられない1 WEEKになりました。

「いつか竹腰重丸を語る会を臼杵市でやりたい・・・」そういう思いはサロン会員になった10年以上前から思っていました。その思いを強くしたのは、6年前大阪で開催された竹腰重丸を語る会に参加して浅見先生のお話を聞いた時、それから1昨年サロン総会出席に前日入りしてJFAハウスのリファレンスルームで竹腰重丸の多くの文章や言葉に接した時、そしてサッカー史研究会の阿部さんからのfacebookからの一言「臼杵市で竹腰重丸を語る会の開催を・・・」の一文でした。

昨年の8月末、臼杵市の知人を通じて大塚さんを紹介していただきました。それから臼杵市に出向くこと3度、何分にも初めてのことで試行錯誤しながら進めてきましたが、至らない点なども多かったと思います。今、思えば、ああすればよかった、こうすればもっとよかった・・・と思うことも多々ありますが、これを引き金に継続していきたいと思っています。

浅見先生のお話には引き込まれていきました。明治・大正・昭和を生きてきた竹腰重丸の写真や記録を追いながら、そこに現れたのは今、私達がサッカーと関わる礎を築いてくれたこと、そして竹腰重丸の誕生から終焉までの生涯を垣間見ることができたことでした。戦時中、一時疎開していた庄内の阿南村小野屋（今は由布市）は、私の住んでいる大分市のすぐ傍にあり、2日前も水汲みに行った時に通った町です。「竹腰重丸はこの川を見て、この山を見て戦時中生活していたのか・・・」と感慨に耽りました。

今、テープ起こしを行っています。今しばらくお待ちください。

この度は大塚さん、安東さんはじめ臼杵市の方々に協力をいただきました。ありがとうございました。また浅見さん、牛木さん（2度も大分に来ていただき）には本当にありがとうございました。

歴史はなぜ大事なのか？なぜ記録を残さなければならないのか？先人たちの歩みを後世にどう伝承していくべきなのか？

そういうことに頭を悩ましながら、少しでも前へ進みたいと思います。

それから、下記に講演に参加されたされた方のメールを紹介しておきます。

*****以下、引用*****

昨日、市民会館に出席させて頂きました。17時に職場に約束がありご挨拶も無しに失礼しました。

私、縁あって臼杵市海浜に住んで居ます。まさか、この地から日本サッカー界の偉人が輩出しているとは驚きました。今で言えば本田圭祐と岡田監督と川淵チェアマンを足して三で割らないみたいなスーパースターですね、ノコさん（笑）

と同時に余りにも地元でも知られていない事実、臼杵市市民の商売下手さや呑気さを実感致します。

途中退席されましたが、臼杵市市長も列席でした。是非とも生家跡に記念碑や記念館を考慮出来ないものかと思いました。臼杵市 嶋川泰介(ボランティアプレス)

【阿部 博一 (サロン2002)】

「サロン2002」絡みの日本のサッカーの歴史を訪ねる旅に四年ぶりに参加しました。今回も地元の皆さんに大変よくしていただき、期待以上の素晴らしい旅を楽しむことができました。臼杵及び大分の関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

さて、ここでは極私的な参加理由を述べさせていただきます。

実は僕の母親はかつて、東京大学図書館に館長秘書として勤務していたのですが、当時の館長は宗教学の権威であった岸本英夫氏（故人）でした。子供の頃から、事あるごとに「岸本先生」という人物に

ついて、母親から聞かされてきました。

ところが、「日本サッカー史研究会」で、牛木素吉郎さんや浅見俊雄さんたちと勉強させていただくようになって、その「岸本先生」が、東大ア式蹴球部（サッカー部）の黎明期に兄弟で選手として活躍され、1925年（大正14年）に今回のシンポジウムの主役である竹腰重丸ら有望選手が入学するや、「十三会・東大梓クラブ」を作って第一線を退き、後輩たちに託したメンバーの中心人物だったということを知ったのです。

あの「岸本先生」が（東大の）サッカーに深く関わっていたということを知り、大変驚いたと同時にちょっと嬉しい気持ちもありました。サッカーとは縁も所縁もないと思っていた自分の母親が、僅かながらでもサッカー史に名を残した人物と交流があったことを知ることができたからです。そのような縁もあり、その後竹腰重丸についても興味・関心を抱くようになりました。

今回、初めて訪れる歴史的な城下町・臼杵市で開催される「竹腰重丸を語る会」に参加することをとっても楽しみにしていたのには、そんな理由があったのでした。

ちなみに、前回訪れた那智勝浦町では、僕の父親が戦地インドネシア・ハルマヘラ島から引き揚げて来た際に帰着した田辺港を初めてみることができました。

今回の「竹腰重丸を語る会」に参加して、前回のシンポジウム同様、東京でもシンポジウムを開催できたらいいなと思いました。選手・指導者・協会役員として大いに活躍され、日本サッカーに並びないほどの貢献をした竹腰重丸氏について、もっと多くの人々に知って欲しいと考えたからです。あわせて今回知ることのできた、同じ臼杵出身の日名子実三氏についてもさらに調べ、日本サッカー協会標章の八咫鳥の謎についても触れていければと思いました。

【小堀 俊一（日本サッカー史研究会）】

「サロン2002 in大分（臼杵）」への参加は、2009年に開催された「熊野の中村覚之助—日本サッカーのパイオニア」（スポーツ文化研究会「サロン2002」共催）について2回目でした。そして、まさに「早春譜」の時節、存分にサッカーと風景が記録された「臼杵」を堪能しました。関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

以下思いつくままに述べてみました。

◆中村覚之助と竹腰重丸

不思議な縁を感じる2人です。

日本サッカーの先覚者である中村覚之助は1906年（明治39）7月3日、28歳の若さで亡くなっています。そして同じ年の2月15日に竹腰重丸は生まれました。まるで28歳でこの世を去った覚之助の無念を晴らすかのように竹腰重丸は終生サッカーに没頭し、選手・指導・協会で多大な実績を残した。戦後復興への貢献を知り、日本サッカー中興の祖だと思いました。

◆日名子実三と竹腰重丸

2人がともに臼杵市出身とは、なんとも贅沢であると感じました。

日名子実三はいうまでもなく彫刻家ですが、彫像以外のメダル・建造物・レリーフ・記念碑など多岐にわたる作品を手がけた造形作家といわれています。当初サッカーとは縁もゆかりもないままに芸術の道をひた走った日名子ですが、彼の多方面での活動から、1931年（昭和6）にサッカー協会のシンボルマーク「八咫鳥」のデザインが生まれたことを実感することが出来ました。

日名子は、時間軸で見ると中村覚之助より20年後、竹腰重丸より13年前に生まれています。丁度両者をつなぐ位置づけで活動したことになります。したがって、竹腰重丸は1933年に「大日本蹴球協会・理事」となり1936年「ベルリン・オリンピック」にはコーチとして参加しています。当然協会のシンボルマークに接していたことが推察されますが、はたして両者は同じ臼杵市出身として交流があったので

しょうか？あったとするとどんな交流だったのでしょうか？ 次回のシンポジウムでお聞きしたい気がしてきました。

◆日名子実三諸作品

★「八咫鳥」

1936年の作品を実際に会場で拝見することが出来てうれしく思いました。小ぶりの物とはいえ貴重だと思います。サッカー協会への展示を考慮中とのことですが、日名子実三の位置づけが協会内できちんとされることが必要と考えます。シンボルマークの由来等の説明で見ると、必ずしも明確でない気がするからです。



図1

★「大友宗麟公銅像」(1937建設)

この像の建設に際しては、「臼杵市出身で大連在住の実業家首藤定氏の賛助を得た」とのことです。（「日名子実三の世界」広田肇一著）

なお、この除幕式に際して、小型記念スタンプ（小型通信日付印または図案文字入り通信日付印）が大分局場内の臨時出張所で押印されています。（図1）

★「八紘之基柱・あめつちのもとはしら」(1940年竣工)

戦後「平和の塔」として残され、また1946年8月に「八紘一字」の文字と「武人像」が撤去されましたが、武人像は1962年10月に復元されました。ただ、復元の際に3本足の「八咫鳥」は2本足でくちばしも小さくなっている、とのこと。（前掲著）

この作品の完成を記念した切手が発行されていますが、同時期に「紀元二千六百年日向建国博覧会」開催を記念し、「八紘之基柱」を描いた記念小型スタンプ（宮崎局）で使用されています（図2・3）。

<図1と2の出典：「戦前の小型記念スタンプ集」日本郵趣出版・2013年刊>



図2



図3